



国立国会図書館 当世奇話 2巻 208-156



ガラス使用



当世奇談

才子
必讀

当世妙々奇談

上
大森

208
2
156



自叙

貳

吳館内倦睡、隱几、有客稱子墨客
卿來而閱几上之書、赫然而怒曰、古
蒼頡造字、天雨粟、鬼夜哭、正為汝
輩而哭也、夫文者貫道之器、經國大
業、不朽盛事、豈為謗毀而設乎哉、



長嶋町平目
大野屋惣八



此書所列、皆當世俊傑、藉不能褒揚、
何忍為此、而毒口謗訕、毫無忌憚、蒼蠅
玷壁、跖犬吠堯、良有似也、豈非拔舌之
業果哉、答曰、唯、否、夫此書所列、實
當世英傑、然君請看、彼輩讀之、將為
何態、其上者、輒然而哈、置毀譽於度外、

其下者、方奮拳角口、忿憤怒爭、不知其
謗之愈大、而其短之愈顯、更為後編之
案也、紆誅直諫、禹拜善言、由此觀之、
謗毀之加己、正它山之石、而所以砥礪
名行者也、不其然乎、時晨鐘一敲、睡
魔正去、座客不在、祇聞戶外嗽、之

聲、蓋鳳朗已死、恐其鬼哭、

必^子讀^子 當世奇話初篇卷之上

何毛具館内著

評水滸羅貫中罵馬琴

曲亭馬琴より下町の偶居をなめると山の

名^の名^の郡^の引^の筋^のま^のう^のう^の籠^の翁^のの^の閑^の極^のた^のう^の二^の著^の

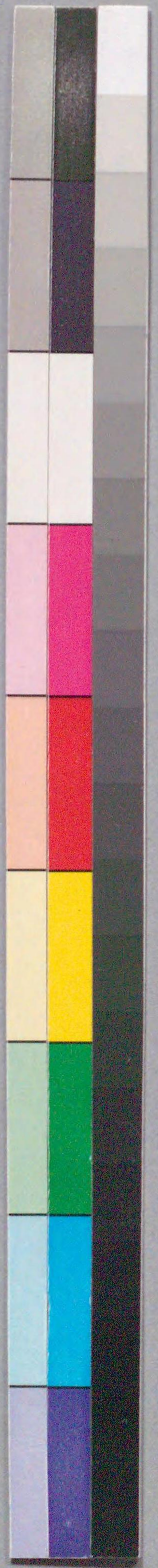
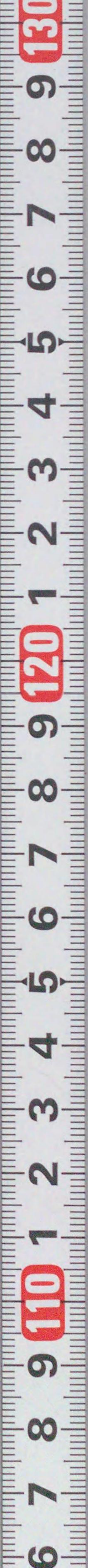
他^のを^のり^のり^のと^のして^の喜^の小^の名^のの^の輩^のと^の史^のつ^のり^の年^の

来^の丹^の桂^のの^の八^の大^の傳^のも^の結^の局^のふ^のお^のび^の世^の上^のの^の評^の刺^のま^のり^の

う^のろ^のく^の他^の者^のの^の部^ので^のり^の常^のよ^の市^の人^の多^のく^の後^のふ^の来^の者^の多^のし

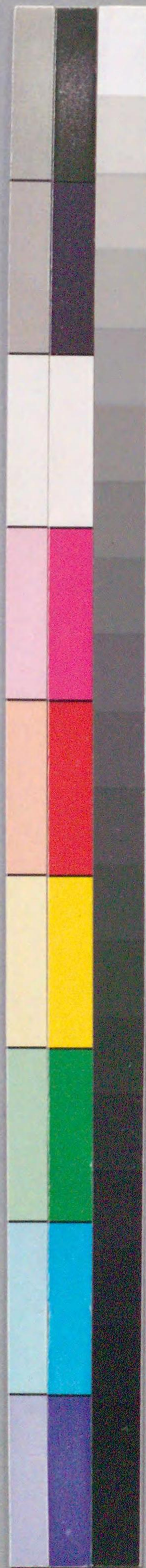
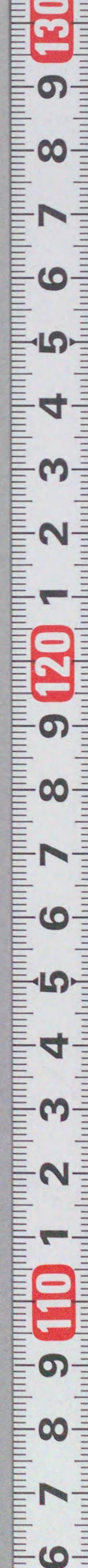
何れは翁のこころとを判行の書肆あるもの識の
 醫者者など大おをそせ服しるは馬琴殿中人
 こところえありしが或日玄園へ一人の客きつりてお格
 を方より美りける者あるが酒面積いしうた車
 あつて見せしは身中うまむり改者も人へ通達し
 るべしと控極お案内を乞ひのありお次の者お
 りも書肆が戯作をこのまふとたひひやく横
 風あるのうまをかひひらるが昔風種甚あ中しく

何れは翁のこころとを判行の書肆あるもの識の
 とかくし巨人おる次るおすげとまゝ又後しれよと有れ
 ばやがて書齋へ健ひ今お客をまわら昂控し上原
 とをり儀者夫のこ味線らひさる梅をたつて天井板を
 あつてつめこやうおつとそり入り噴かうひとつて
 こそりおやう曲亭馬琴と足下ある者儂々羅
 貫中と漢人としてお者水滸傳のるおつと彼足
 内解を蒙り兵中心にほがたとともおわたり



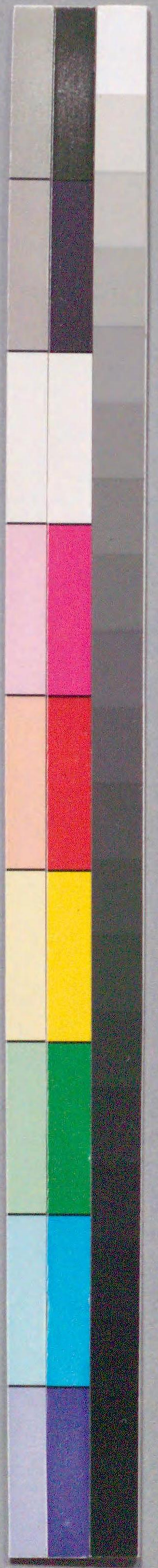
貴著れ八大傳もまうさぶ水滸傳の翻經を別傳
ふわさうの妙業といひてもまう姓名をとり久人板
をへら〜唐山のまう〜を日本の咄お伝ひまゐるる
るに奪胎換骨古今のまう〜高慢い〜ま
が行らうらう〜ぞんト二三條の種中まう〜ま
あといつせ〜まう〜つらねが馬琴心中まおら
れ平坐おの八大傳の自慢を水滸傳の趣向不
粗惡があるまう〜まう〜惡にせ〜まもわれが背中

小冷行をまう〜濯貫中と知らう〜ま
てとやまま〜死ののを例の戯傳をたのまふま
者あま〜あひ仔細の千足あま〜まのま
よりとん〜遊戯まふあひひら〜あかひま
らうがぬ〜よりぬ〜ね老人まねられ〜ま
をまの〜まは是号れ〜ひも〜中身下れ下
身ふ〜ま〜て面月あま〜ま
唯今あわれせられ〜ま〜ま〜ま



ごうとありありあり下拙世の著述と貴公極の糟粕
を越りありありとつたてていふとこそまことなり
しつとありあれが中々とをいへ水滸の正史評詠い
こそ悪口をまうそのと偽はけりて下拙に於ていふ
とでござるといひいひをまねが羅貫中うらとあり
ひ足下の昔儀漢人たるをいへて日なれ彼名なるど
續しとありありありありありありありありありあり
とどしたといひ正人君子の形状とあるとありありあり

争を弄して人お勧懲戒とありのがかのれがんげ欺く
とありありありありありありありありありありあり
女水滸傳などありありありありありありありありあり
を續ておかえがわりありありありありありありあり
是下水滸傳お三等の趣向をつけ初ハ権史半ハ魔界
終ハ忠臣といふ説をとり金聖歎が七十回ありて全部と
そのの説を駁し公然と自放りてたと羅貫貫中を
て今ふありありありありありありありありありあり



覺^{あき}がわるべ^{あき}る^{あき}は^{あき}足^{あき}下^{あき}の^{あき}如^{あき}き^{あき}俗^{あき}了^{あき}者^{あき}あ^{あき}て^{あき}ハ^{あき}三^{あき}等^{あき}
 の^{あき}趣^{あき}向^{あき}な^{あき}ども^{あき}出^{あき}来^{あき}そ^{あき}う^{あき}る^{あき}こ^{あき}ら^{あき}ぬ^{あき}が^{あき}聖^{あき}賢^{あき}と^{あき}ふ^{あき}の^{あき}は^{あき}ざ^{あき}れ^{あき}と
 も^{あき}それ^{あき}い^{あき}それ^{あき}を^{あき}主^{あき}義^{あき}ひ^{あき}と^{あき}ら^{あき}の^{あき}説^{あき}小^{あき}して^{あき}明^{あき}友^{あき}門^{あき}人^{あき}ま^{あき}ど^{あき}人^{あき}類^{あき}
 其^{あき}の^{あき}う^{あき}ら^{あき}け^{あき}も^{あき}判^{あき}布^{あき}の^{あき}通^{あき}筆^{あき}ま^{あき}ど^{あき}書^{あき}わ^{あき}け^{あき}の^{あき}ま^{あき}の^{あき}
 へ^{あき}千^{あき}古^{あき}未^{あき}發^{あき}の^{あき}所^{あき}謂^{あき}作^{あき}者^{あき}の^{あき}隱^{あき}微^{あき}を^{あき}見^{あき}出^{あき}と^{あき}ら^{あき}の^{あき}高^{あき}慢^{あき}
 他^{あき}も^{あき}も^{あき}う^{あき}ら^{あき}え^{あき}ぬ^{あき}と^{あき}ら^{あき}被^{あき}聖^{あき}歎^{あき}か^{あき}七^{あき}十^{あき}四^{あき}を^{あき}わ^{あき}り^{あき}て^{あき}大^{あき}團^{あき}
 圓^{あき}と^{あき}ら^{あき}る^{あき}の^{あき}玉^{あき}粒^{あき}め^{あき}と^{あき}も^{あき}の^{あき}説^{あき}あ^{あき}て^{あき}千^{あき}載^{あき}の^{あき}下^{あき}昔^{あき}儂^{あき}知^{あき}己^{あき}
 と^{あき}も^{あき}い^{あき}ふ^{あき}と^{あき}言^{あき}あ^{あき}る^{あき}ま^{あき}下^{あき}と^{あき}ら^{あき}ふ^{あき}く^{あき}せ^{あき}す^{あき}若^{あき}七^{あき}十^{あき}四^{あき}を^{あき}わ^{あき}り^{あき}

て^{あき}全^{あき}部^{あき}と^{あき}せ^{あき}ば^{あき}未^{あき}一^{あき}等^{あき}必^{あき}捨^{あき}ら^{あき}る^{あき}も^{あき}れ^{あき}が^{あき}作^{あき}者^{あき}の^{あき}お^{あき}高^{あき}の^{あき}の^{あき}
 ら^{あき}ず^{あき}と^{あき}え^{あき}聖^{あき}賢^{あき}み^{あき}宋^{あき}江^{あき}が^{あき}方^{あき}流^{あき}を^{あき}う^{あき}ら^{あき}ぬ^{あき}が^{あき}以^{あき}付^{あき}ら^{あき}る^{あき}近^{あき}松^{あき}
 門^{あき}九^{あき}變^{あき}と^{あき}や^{あき}が^{あき}傳^{あき}ら^{あき}る^{あき}津^{あき}福^{あき}路^{あき}本^{あき}此^{あき}訛^{あき}判^{あき}は^{あき}る^{あき}と^{あき}ら^{あき}ふ^{あき}か^{あき}ひ
 昔^{あき}儂^{あき}深^{あき}意^{あき}の^{あき}つ^{あき}て^{あき}編^{あき}述^{あき}を^{あき}ら^{あき}る^{あき}水^{あき}滸^{あき}傳^{あき}を^{あき}う^{あき}ら^{あき}る^{あき}下^{あき}の^{あき}眼^{あき}刀^{あき}
 を^{あき}の^{あき}つ^{あき}て^{あき}是^{あき}聖^{あき}賢^{あき}を^{あき}い^{あき}え^{あき}る^{あき}ま^{あき}ど^{あき}人^{あき}類^{あき}か^{あき}つ^{あき}よ^{あき}い^{あき}今^{あき}と^{あき}ら^{あき}ふ^{あき}み^{あき}ふ^{あき}聖^{あき}歎^{あき}
 か^{あき}ま^{あき}ら^{あき}る^{あき}以^{あき}付^{あき}ら^{あき}る^{あき}と^{あき}ら^{あき}る^{あき}を^{あき}論^{あき}ん^{あき}ど^{あき}玉^{あき}駢^{あき}麟^{あき}世^{あき}儂^{あき}儂^{あき}儂^{あき}儂^{あき}
 水^{あき}滸^{あき}の^{あき}英^{あき}雄^{あき}え^{あき}ん^{あき}ま^{あき}う^{あき}と^{あき}て^{あき}遂^{あき}ふ^{あき}吳^{あき}周^{あき}が^{あき}謀^{あき}の^{あき}あ^{あき}歎^{あき}よ^{あき}ひ
 う^{あき}せ^{あき}ら^{あき}る^{あき}と^{あき}ら^{あき}る^{あき}孔子^{あき}孔^{あき}春^{あき}秋^{あき}の^{あき}書^{あき}法^{あき}よ^{あき}ら^{あき}る^{あき}ひ^{あき}麟^{あき}と^{あき}獲^{あき}



て業を後よりといふと一言一語と作者此れいびをひら
けりといふや天下通されば慶長殿の権江御あつといふ
最初の論おひたつといふれはあかきうり一部の小説
とてつて遂に麟経お此にたる聖教が後辭の気量
あて君懐知己といふおれたのらをりてあり下ご
筆お起るをたこれお中人の俗見をりておの他者の狂
言おかくせうおそれたあつておんおのえのといふら
この方のともひおつておのいふも君懐萬巻の書を

えん安邦定國の大略を胸お藏むといふども昔時宋
の政をこれお人お知れと朝おをりて正人忠直の野おらつて
有志のちの擯行せつておいふともおれたや多く史筆を
とておへつらひて後世お欺くとの多きより満肚裏の不平
を水滸の豪傑おさくして後世おつるものやこれお筆法夫
子おさるるび竊お常時の君臣を兵利を知己を千載お
侯とおありつて一字お褒褒駁駁といふとも微意を寓おらつて
お源おありつて堂足下の筆のよく萬一をりておらつて





130
9
8
7
6
5
4
3
2
1
120
9
8
7
6
5
4
3
2
1
110
9
8
7
6

んや足下まゝ常小の西遊記（西遊記）久（久）す水滸傳（水滸傳）人かか
 とも小共中を海（海）とあつて自他の八犬傳をりて西遊
 の上におつた了簡であつたが西遊記の道家の洒落（洒落）を
 老の微意を寓せしめられたが尋常の九眼をりて
 積（積）びてふあつた悟室悟淨八戒の二人を二部のつて
 ありて二天の使宿お配（配）さるまど奇妙小丈夫のゆゑあつた
 こそ足下又足下輩の服刀のともみとありま水滸の二百零
 八を入扱（扱）かゝとのつて上天星宿の配意をあらはるゑ

ありて足下小説をよむふと俗語をかかえつたつて八犬
 意がつらつたねののどやうにも深意あつてあつた
 足下の八犬傳はかうふとと俗間の軍書おあつた軍書（軍書）の八
 犬士（犬士）の大内（大内）の十枝（十枝）まゝのつてありひかへて人扱（扱）でなけ
 れば不審おあつたもつとありまゝつてあつてあつた
 きふあつてあつた八犬傳もあつたあつたあつたあつたあつた
 諸候の女が食飼の犬と配合の一條より車をりまどあつた
 り非類のとりありせあつて回舎料理おもつたあつたあつたあつた



ぬきまのこけり
 大お高身い所こればとも富山の山中を去る食の好む
 て居てとされが養を恩をのべすやと経水とてり情
 して刃をさすもきく犬の子あり足下先年燕石雑志を著
 せしと此瓶を與人化也ども人と交合をとりなりとを樂
 天の詩知引て論しらるるか知えがめりいりふ仙り
 ものぐりるまびとそ犬の魂が英雄と出現し秋水澗の起小
 比せらるるまびとけりたとあり人道滅却のものうらが偶忌
 俗の周尔叶をとそち程のま柄りのいぬとまびとるる序

ちねバヤベー足下燕石雑志を著せしと北群廬翁の
 批評せしむるが返答の由ありとありなり双喜雑記
 記へうさのま上欄へ群廬翁の名次りてとる
 成りて彼ももうきとるうらとれりのこともあるす此不業
 ありけ外京傳と絶交して今の京山など久のあ外の無
 抄法をあらがうせん筆書画會成るをて配りぬの河
 持系とて京山を頼る始末など市井の匹夫もまびとる
 ととあり是下さる存性自性とりつと好んでよく



130
9
8
7
6
5
4
3
2
1
120
9
8
7
6
5
4
3
2
1
110
9
8
7
6
5
4
3
2
1

うごころが足下のちまきとは仁義をともせ大も同様に
せむ大がこころを大の傳をこころも其性の大も預け
せむるんこれまごころを性自性おちりて散る悪はせ
せども馬琴一書の返答きくわまり入て居りたり
論俳諧桃青翁懲鳳朗
昔年六坂の町人花屋某の後園あて世狭さうる桃青
居士江別雲津の本乃寺小靈をたうて居りたり
ちちちち遠忌ふれはをかりひびきく去清紳家

より花の下大明神とわがめまうるぞ死すしゆらうがわり
りるあぞ桃青居士眉を志あさなく怪くぬともあめ
うまれば生希るんの功德あつてかくのよ死駟号ふわづら
あや古池小燈がいの祭句を千萬言てねこればとて
更ふ世老小裨益あつともかたえべとて我生若風流
のころえさごのよりあぬを食のまゆ然して大切なま入
の祿をせえ世界をまごつ死の死しと死後志めんひ
きくそんはいまも藤中お祭句能楷などあつあのれは

まゝ我まはきりて人の家を死せらるるあねばよといと
うけあうらうげうらう思ふほどのもて実不能措かど
世よつまうぬめあひまをれど別て我死後百年の来六十
年東とありこの能措師かどつまうぬめあひまの我海生
の以の世の中しきこひうけまぬめあひま向あるも尚
時のまうまをいひあひの折をこてとて今時の百倍力を
入せてもせんさくのゆたかぬらぐうけで誤らうあふ
くはまふいうて具服の人み批評せらるると一言も

まゝといはゆるれど其罪を我意のめらうてまひ
誤らぬ補ひてくれやうとせむそのひがと知えらう
眼がまうらうとんとて得りを規則とらえんどもあふか
あふいといふ鳥が鳴きども理を非おまげて助る由急良負
の目とあうて文育中間の親をれやうとあふあふに
りころらあふらうとてたとるれ志うるあ我あふををらむを
が能措師どもこのころをもちたまはば我はあふ船号
なごは鼻ふりけ祖翁の徳あふひまのぞなぞとの



けり族ものつこひ能稽が風流のまらもせし稽
 どうやうお位どうけり御よりいふべしむらめづる贈号
 の四時流のつこも我あつて再と丹四時流と上と下とを
 本望するふれを能れをうけどつらふおのつらぬしを
 るつこひをのまらして花の下宗通といふ号をのつこ
 とそよろとびけり風朗と云白痴らつと云遠忌のせり
 翁ふのつて廟者いふつこのつらぬのいまはふ偶居す
 とせつけりまづこの者然として諸國の能稽師どの人傳へ

けりせんをさうおかひ起し例の愛を頭陀袋の脚
 の辨めて半速ふは夕暮一帯一帯日まづ風朗の宅を訪
 んとおかひいけりけりめつらつてふらふ忌日おのれが定めて
 くれが宅へ大勢のともがより集りて居とあらんすつ今明日
 とをさういふつらぬ見物せんを能れ能稽師の處なると
 たりてとれどもいづれも吐せさうなの一人まづらち板橋
 おもひのつらぬのつらぬ見物のかつ一帯のつらぬと
 く園のつらぬの風俗不似つらぬが先縁らちの松と





と唱ふるともろくば無用ありけれとまこと能禱の祖不
 ると云はざりてかりきりとの外の返答ありなれば因
 朗も如満磨の人々お死をせざるなりきり能禱を
 してまこと云々も其方にも能禱をあらと云はざり
 せりまこと云々も其方にも能禱をあらと云はざり
 祖師ともあると云はざりて花の下大明神の賜号を其
 方どもより由縁通すし返とよあまふよりさうりへ
 け事いひとふあむとありきり坐上の人々も其方にも

なるべし又確嶺得無其外の能禱師どももつてさうり
 とて蕉翁の靈りの本像所さうりなり
 董太史塩河岸訪成儀
 松本董齊董玄宰此筆法を自得し已に出藍にか
 まれりく江戸に死一の名家ありとて自ら高きりて
 居りりるある日能禱師よりあまれらる能禱の松本を
 あまれらるがあまり細字に假名にて精観もつれらる
 ちや志なり筆をせめて机ありりこゝろともたかく





6 7 8 9 110 1 2 3 4 5 6 7 8 9 120 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130

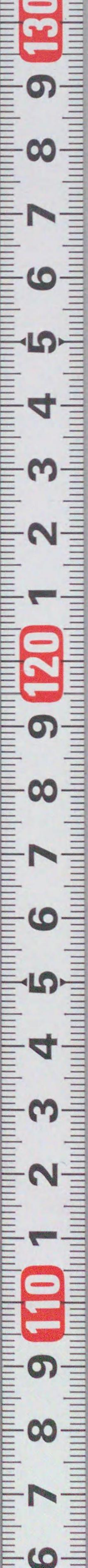
すふは姓を肩し其昌をまきびいとてか筆意も
あつべ倨傲不遜りまどりき海まがりの書
いりある物とまのよそや大徳法帖印をそまか一文す
ある者の積構體勢あとの源流をあることあり秋
右軍印ゆて歸宿り一石家印陶濤一萬教ふ出入
心ま自然融化してつよまをそまふまをそまふ
一書を結然とて書をまき思を以て風雲飛動林
氣溢出し疎放あるがごとくみりて疎密白補一位置

寫小適と仰はるる海が敬儀の俗筆を以て生涯軌
範とするの凡眼を以て等れ論とらるる下れども
ハ筆法拙正とも曰はれまへんまがらふも歴代の書
家を以て誰れ右軍印印しきまへんまがらふも流派か
流を以てまへん門下ふまへん超然融會一筆を以て
一家を以て海が敬儀を以てまへんまがらふも筆々字々形容
の似せらんと欲せむるが如き書印するまへの法
あつべこれこれ海ひよりまへの近日書家と唱



の比々まゝこの病のり故儀がしれぬ中らん董堂と
稱しりか書ふ似せむとて意匠とてわて摹倣し
これどもこれも筆意あふとて書翰をあらざる由意死
ねまを書法をさして下りて花白れ字體の手紙
をりて後世とてんとて一由急晩年骨格を死
りま書風ふり俗ふりゆのりぬ病をばじこや骨
尾まらるるぬ支離滅裂の字紙書たりありよ書辭
薬店まぶの看板をあらむらむらむら俗人の目ふりま

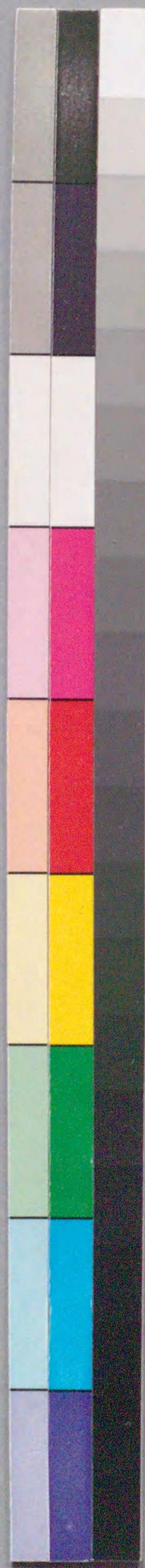
由急一時屋敷なりて書苑の仲間入もあつたり
人物が我書法を自ぬりてとて董堂と名のりて
我あつむとてあつるふ海まゝ其門戸もあつて其悪法紙
うけりて不お稽支離滅裂の字紙あらむ見解まず
く下り能指の板下をくりて天あらやけ粉やの看板
まをあらむとてめい筆一べ死やうもあら下者れり
昔章子原の口一過るるば蘭亭を臨書せりて
東坡先生とれ評晒つて門より入りの終ふ家法あり



とつれより王子敬名家の子ありとよとも自らて河津
の午後とてうづらんと御欲をまき吉人をまらぶのれ
如流海もよく日か書風御まらぐんとおのらるる敬
候がら書風をまらびそとあひまらる候ありてりの
あんのある書風ありてりく音のあるやうなうづら
まらべくはいふ飛白候もいへて唐紙のやうな程
らあつらひるそと口たまるたりのうづらり製法床虫喰
字とらりふ筆法うづらるるおのらるるやの永字八法よ

りもあつらひるは方ありえぬも暇のつけとあつら
えいふとくうかを茶同でもてま論御よむとまらべ
胸中の俗氣を陶治し風雅の道をとらるる俳諧師
あとの文盲御女とあつらるるばば謙で我教よむと
あつれとあつらるるやあらあつらるるあつら董齊をまらへ
平伏しえんとて人やもまき空もつらた風情あつら
ふ頭御擡えび董を史うらりつとてさる思れあつ
よらつて男あつらまらばいひつらとせなともあつら今





208
2
156

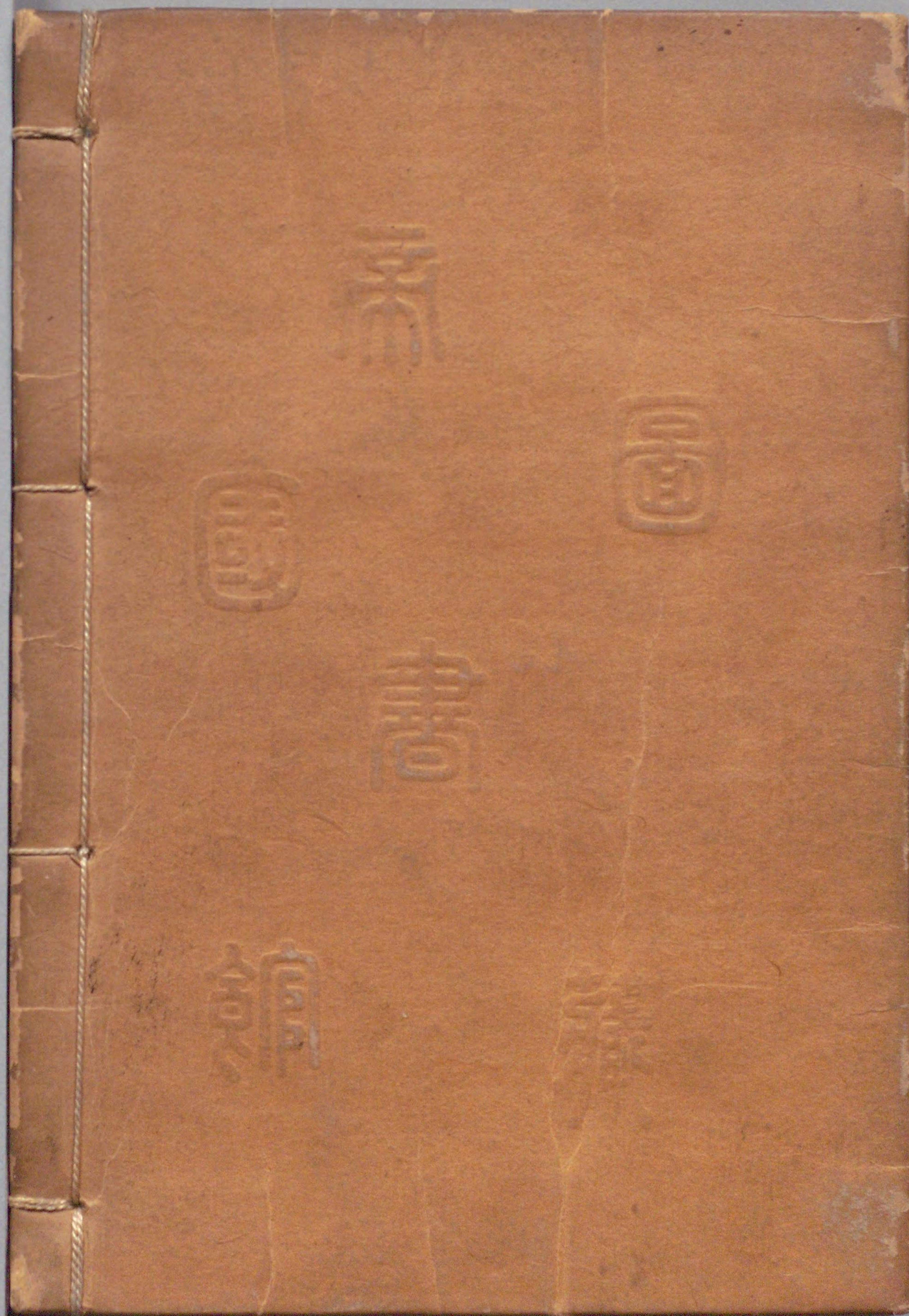


国立国会図書館 当世奇話 2巻 208-156

ガラス使用



国立国会図書館 当世奇話 2巻 208-156



ガラス使用

